



物語の女

モデルたちの歩いた道

山本 茂



講談社

著者略歴

1937年5月、北海道に生まれる。北海道
大学農学部卒業。毎日新聞東京本社に入
社。現在「サンデー毎日」編集部。

現住所 〒359 埼玉県所沢市中新井3—
21—4—101

物語の女 モデルたちの歩いた道

昭和五十四年十二月二十日 第一刷発行

著者 山本 茂

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二／郵便番号一二二
電話東京〇三〇九四五一一（大代表）振替東京八三九三〇

編集 株式会社第一出版センター

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 一一〇〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えます

© Sigeru Yamamoto 1979, Printed in Japan

物語の女

モデルたちの歩いた道

目次

西洋菓子 of 匂いのする少女

重田根見子

5

伊藤整『雪明りの路』

カジノ・フォーリーの名花

梅園龍子

31

川端康成『浅草紅団』

浅草の可憐な踊子

小柳雅子

53

高見順『如何なる星の下に』

バラ色のミューズ

山本安英

75

大手拓次『藍色の墓』

海老茶の袴への片恋

土室きわ

95

室生犀生『抒情小曲集』

美しく誇り高き才女

細木絹子

117

堀辰雄『聖家族』

短かきに過ぎし愛の日々

水戸部アサイ

137

立原道造『優しき歌』

憧れやまぬ恩師の娘

酒井百合子

161

* 伊東静雄『わがひとに与ふる哀歌』

流水亭の薄幸な女

お袖

187

* 尾崎士郎『人生劇場』

生気放つ若き寡婦

渡部文子

207

* 森敦『月山』

明日なき男たちの青春

深井露子

227

* 阿川弘之『雲の墓標』

小鹿のようなハイ・ジャンパー

熊本秋子

247

* 田中英光『オリンポスの果実』

装幀・政田岑生



西洋菓子の匂いをする少女
重田根見子

—— 伊藤整『雪明りの路』

小樽は坂の町である。

街は半身を海へ没したまま静止したような地形のため、山の手に降った雨は傾斜のきつい溝を昼も夜も水音高く流れ下った。

大正末期の小樽は、物資の一大集散地であるとともに文教の中心地でもあった。

朝、小樽駅へ吐き出された黒い詰襟の少年たち、海老茶の袴の少女たちは、思い思いに自分の学舎へ向かって坂を登っていく。この地方の最高学府、小樽高等商業学校（現・小樽商大）は地獄坂と呼ばれる急傾斜の並木路を登らねばならない。

夕暮れになると、反対に少年少女たちの黒っぽい制服の流れは、坂を下って駅舎に吸いこまれていく。生徒たちは、ひと駅かふた駅ほど離れた自分たちの村へ散っていくのだった。

汽車通学の生徒たちが青春に体験する、あのナゾめいた想い、好きな相手と同じ車両に乗り、素早い流し目を与える、心ときめく想いが彼らの日々を満たしていたであろう。

大正十三年八月のある午後、十九歳の伊藤整は、それら多感な少年の一人として小樽駅から汽車に乗った。多くの学校は夏期休暇に入っていたが、私立学校の一部は休みがズレこんで、まだ数人の女生徒が乗り合わせていた。

小樽高商三年の伊藤は、選ばれた秀才という過剰な自意識のため、彼女らの視線をうけて顔を少

し赤らめていたにちがいない。彼は赤面症に悩まされていた。

バラの花を売る

その夏、文学仲間の川崎昇と同人雑誌を出す資金づくりのため、公園通りに夜ごと露店を出し、石鹼とバラの花を売っていた。そのバラを仕入れに塩谷の実家へ帰るところだった。

「伊藤さん、バラを売ってるんですって？」

突然、顔見知りの女生徒が声をかけてきた。彼女は緑ヶ丘高女（現・札幌香蘭女子高）の生徒で、伊藤がひそかに好意をよせていた忍路村の浅田絶子の妹だった。絶子は頬の白い、丸顔の、いつもぼんやりと夢想しているような表情の美少女で、伊藤は彼女に似たティチアーノの絵「白衣の女」の写真版を図書館で見つけ、そのページを切り取って秘蔵しているほどだった。

伊藤は、バラが品切れして困っている、というと、

「うちの庭にうんと咲いているから採りにいらっしゃい」

と少女は誘った。

その時、彼女と一緒にいた瞳の大きい、少し年かきの女生徒が話しかけてきた。

「ねえ、行きましょう、私も一緒について行ってみる」

彼女は大がらで、この春、札幌の女学校から転校して余市から通っている、ちょっと軟派めいた雰囲気を持つ少女だった。

伊藤は塩谷駅を乗り過ごし、少女たちと一緒に次の蘭島駅で降りた。そこから忍路村まで峠を一つ越して歩いていった。彼がここまでついできたのは、姉の絶子に会えるかもしれないという期待もあったからだ、なぜか絶子は一度も姿を見せなかった。

帰りは再び、あの瞳の大きい少女と一緒にになった。蘭島駅で、小樽へ引き返す伊藤と、余市へ向かう少女とは、反対ホームへ別れた。別れるとき、少女は囁いた。

「私、お手紙書いてもいい？」

少女は重田根見子といった。

そのとき、整は知るよしもなかったが、やがて彼の青春に深く痕跡を残す初恋の女の名となるのだった。

のちに小説家、評論家、翻訳家として一家をなす伊藤整だが、その文学的出発は詩人としてだった。処女詩集『雪明りの路』は、素朴な抒情詩人の誕生を告げる記念碑となったが、いま改めてペーじを繰ってみると、じつにおびただしい数の恋愛詩がちりばめられていることに気づく。

「この詩集は或は一つのストオリーを追つてゐるかもしれない」

と「序」で書いているが、読みすすむうちに、一つの恋の始まりと終わりが透けて見えてくる。

初恋の少女の残像は、小説『鳴海仙吉』（昭和25）では巧みにデフォルメされているが、『若い詩

人の肖像』(昭和31)では、もはや細部まで露わに、可能なかぎり実像に近く描き出されている。時間が、作者を大胆にしたのだろう。

詩人と少女の出会いの情景は、この『若い詩人の肖像』に拠って要約してみた。小説は、重田根見子の印象をこう書いている。

……黒い袴をはいた根見子は無口で、目が大きく、しめった皮膚をして、ひっそりした感じの少女であった。甘い西洋菓子のような匂いのする身体を持ったこの少女は大胆で、しかも何を考えているか分らないところがあった。

彼女が初めて伊藤整と出会い、吊り橋を渡るような危うい恋をしたのは緑ヶ丘高女三年、十七歳の時であった。伊藤が「色濃いボタンの花」と形容した少女も、生きていたらもう七十二歳の老境に達しているはずである。「東京・中野区にいる」という手がかりをたどって、東大付属病院物療内科の病棟で付添い看護の仕事をしている重田根見子に会えたのは、昭和五十四年一月下旬の寒い夕暮れであった。

根見子、いや根上シゲルは、こだわりのない笑顔で私を迎えてくれた。いまは再婚した亡夫の姓「宮崎」となっている根見子は、こざっぱりした独り暮らしだった。入院病棟の炊事場でインスタントコーヒーをふるまってくれたうえ、後日のインタビューも快諾した。

再会の日、中野区の狭いアパートの一室は、ポピーの花々がいっぱい活けられてあった。

「私は花が好きでね。いちにち、ぼんやり花を眺めていることもあるんです」

そう語る根上シゲルは、なによりも伊藤整の心を惹きつけた黒目がちの大きな瞳が印象に残る。

それに、しっかりした鼻すじ、豊かな唇。五十五年前についての正確な記憶力も、生来の頭の良さをしのばせた。

運命的な二人の出会いの日についても、彼女はよく覚えていた。

「あの日は、試験だけで午前中に終わったので、緑ヶ丘高女の生徒ばかりが同じ車内に乗ってたんです。小説で浅田絶子の妹、となっているのは角田静子さんのことでしたね、伊藤さんは姉のツエさんが好きだったんでしょう。あの日、伊藤さんは最初から忍路の浜へハマナスを採りに行くところだったといっていたので、静子さんが家の裏にいっぱい咲いていると教えたんです。バラではなく、ハマナスでした」

根上シゲルは、早く余市の家へ帰ってもつまらないと思っていたら、角田静子が「あなたも行ってみない？」といったので、忍路は初めてなので急に行ってみたくなった。

「小説では、私が伊藤に関心があって積極的に近づいたように書いているが、そんなことはなかった。私には兄も弟もいて、その友だちがよく遊びに来ていたから、ことさら男性が珍しかったわけではないし、そんなに意識してたわけでもなかった」

彼女は五尺一寸五分（約一・五六メートル）と当時としては大がらだったのと、札幌北星高等女

学校からの転入生ということで、ちょっとハイカラで不良じみた少女と見られていた。この転校について、恋愛事件が原因らしいという噂が立って、のちに伊藤は悩んだりしている。

「それもまったくのデマですね。私は派手やかな性格だったかもしれないが、けっして不良少女じゃなかった」

そのころ、同じ余市から庁立小樽高女に通っていた後輩の一人は、根上シゲルの印象をこう語っている。

「他の女生徒と付き合わない、珍しい存在でした。袴も海老茶でなく黒っぽい色で、それを胸高に締めて……いまふうにいえば、ダンディな、ませたお嬢さん、という感じでした。私は、ただ珍しいタイプの人が乗っている、と思っていました」

地方都市の学園には、美しく大胆であるために、しばしばミステリアスな誤解に彩られた女生徒がいるものだ。根上シゲルも、そんな小悪魔タイプの一人だったのだろう。

根見子と知り合ってから、整はその魅力にぐいぐい引きずりこまれていく。あんなに好きだった浅田絶子（角田ツエ）も、好きだという気持ちに変わりはないものの、いまや白っぽく貧血したように見えるほどだった。

伊藤からの最初のラブレターは『藤村詩集』に挟んで、シゲルと一緒に余市から庁立高女に通っていた妹の律（15歳）を仲介して手渡された。その後も、郵送される時のほかは大い詩集に挟んで律が受け取っていた。シゲルは返信の差出人を「根上滋」と書いて家人の目をカムフラージュし

た。(ちょっと理解に苦しむが、伊藤は長男に「滋」と命名している)

『若い詩人の肖像』では、初めてのデートは蘭島駅で落ち合い、海岸ぞいに四キロの道のりを余市まで歩いている。

八月中旬の暑い日、伊藤整はテニス帽をかぶり、白い紺の浴衣に下駄ばきで蘭島駅のプラットフォームに立った。

……木のベンチに重田根見子が、髪をお下げにし、赤い大きな紺のついた浴衣を着、緑色の帯を男の子のように結んで腰かけていた。

私は根見子のその娘らしい姿を見たときびっくりした。私はそれまで根見子を、汽車で毎日通学する時の、着物に黒い袴をつけた姿しか見たことがなかった。(略)だが、今日の根見子は、村や町の家並の間を、用足しに歩いたり、お祭の日に着かざって白粉を塗り日本髪を結ったりする娘たちの一人であった。私がびっくりするほど彼女は女らしく見え、私がはっと思うほど魅惑的であった。

ね、ナイシヨね、というように根見子は私に笑顔を見せた。私たちは、一言ももの言い合わず、駅の人たちに見とがめられるのを怖れるように、カッと日の照っている砂の多い外の道へ出た。根見子は白い木綿のバラソルを広げた。

田舎の秀才らしい男の小心さと、いざとなった際に示す女の大胆さとコケツトリー。それらを剥き出しに照らし出す真夏の太陽。

そして意外にも、その日のうちに道から少し小高い、灌木の生えた草むらの中で二人は結ばれてしまう。

しかし、根上シゲルはあっさり否定した。

「あんなこと、フィクションですよ。だって、その翌日にも、妹と二人で伊藤さんたちの夜店をのぞきに行ったくらいですから。何かあったのなら、恥ずかしくて行かないでしょ」

血で書いた手紙

詩集『雪明りの路』（大正15）で根見子を歌ったと思われる最初の詩は、次に掲げる「秋の恋びと」である。

木の葉はおしなべて散つてしまった。

秋はいたる所に

つめたい異人の瞳を覗かしてゐる。

瓜ざね顔の まつ毛の黒い
ものはぬ恋びとよ。

お前はかずかずの思ひを燃やして
毎日 だまつて

私と人知れぬ目を交す約束を忘れないが
あゝお前はその白い手を

何時になつたら私へさしのばすの。

秋はすつかり木の葉を落して

明日にも冬が海を鳴らしてやつて来るだらうに

お前はその思ひを

何時になつたら私に語るのだらう。

「瓜ざね顔」「黒いまつ毛」など若き日の根上シゲルの面影をよくとらえている。彼女は詩のとおり秋になるまでは「白い手」をさし伸ばしはしないし、整もそれをとらえてはいなかった。二人が本当に結ばれたのは、秋風の立つ季節。たぶん大正十三年九月の初め、黒々とした倉庫が建ち並ぶ、夜の波止場である。材木を積んだ上に腰かけて話をしていたが、ふと沈黙が訪れたとき、突然、伊藤は少女におおいかぶさってきた。接吻も交していない幼くて淡い恋は、唐突に性愛の世界